

令和 8 年 お茶づくり技術情報 (No.6)

2026 年 7 月 21 日
佐賀県茶業技術協会
佐賀県茶業試験場

1. 生育と気象

1) 二番茶摘採・新芽形質

表 1 二番茶摘採日

本 年	前 年	前 5 か年平均
6月15日	6月17日	6月13日

表 2 二番茶収量と収量構成要素

■ 二番茶収量 (kg/10a)

本 年		前 年		前 5 か年平均	
収 量	指 数	収 量	指 数	収 量	指 数
652.4 ± 34.2	83 (88)	738.2 ± 76.7	94	788.2 ± 45.4	100

注) 指数は、前5か年平均を100とした値であり、本年の下段括弧内の値は前年比を示す。

■ 百芽重 (g)

本 年		前 年		前 5 か年平均	
重 量	指 数	重 量	指 数	重 量	指 数
57.7 ± 4.9	86 (85)	67.6 ± 4.1	101	67.0 ± 4.7	100

■ 新芽数 (本/m²)

本 年		前 年		前 5 か年平均	
芽 数	指 数	芽 数	指 数	芽 数	指 数
2000 ± 126	132 (138)	1450 ± 89	96	1511 ± 125	100

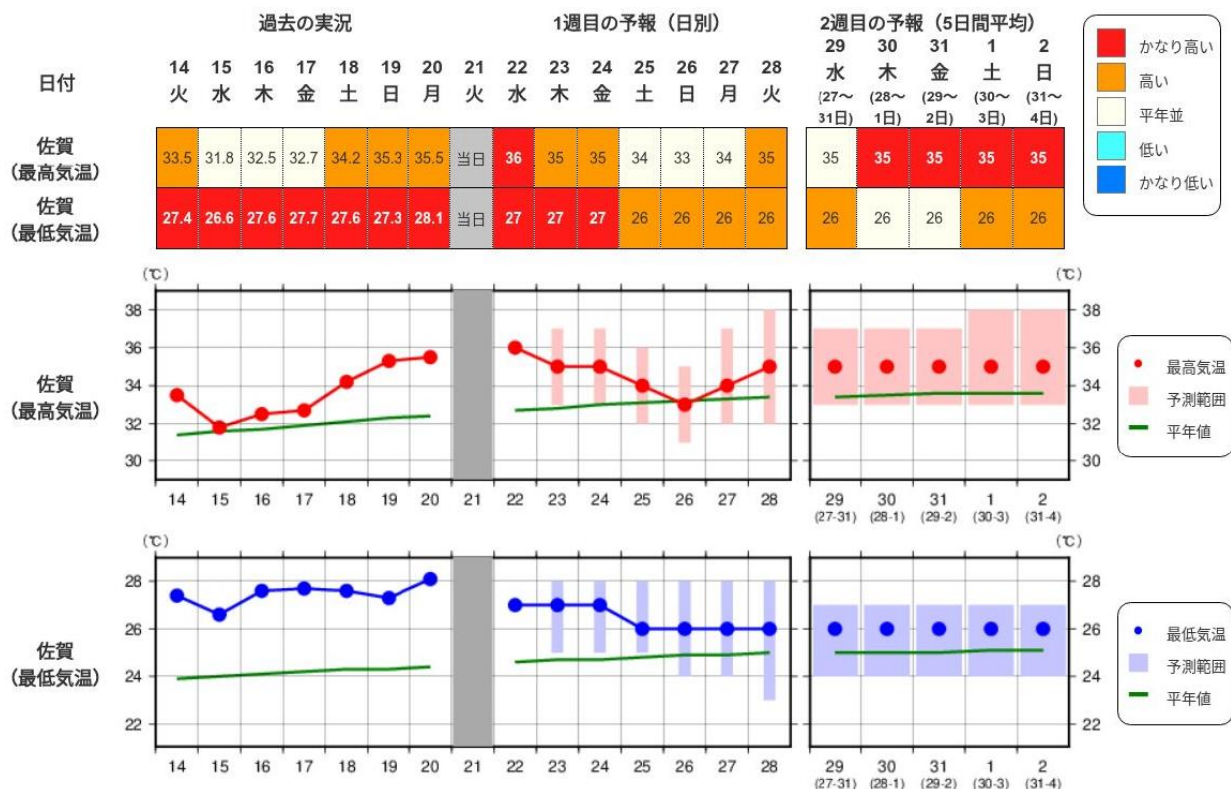
■ 出開度 (%)

本 年	前 年	前 5 か年平均
77.1 ± 9.5	92.1 ± 2.7	70.0 ± 9.2

- (1) 本年の二番茶摘採日は6月15日で、前年より2日早く、前5か年平均より2日遅かった(表1)。
- (2) 二番茶収量は、652.4kg/10aで、前年比88、前5か年平均比83と少なかった。(表2)。
- (3) 百芽重は、前年比85、前5か年平均比86と小さかった。新芽数は、前年比138、前5か年平均比132と多かった(表2)。
- (4) 出開度は77.1%で、前年より約15%低く、前5か年平均より約7%高かった(表2)。

2) 今後の気象の見通し

■ 2週間気温予測（気象庁、2026年7月21日更新）



■ 1か月予報（気象庁、2026年7月16日発表）

向こう1か月の天候の見通し

九州北部地方（山口県含む）（7/18～8/17）

	平均気温（向こう1か月）	降水量（向こう1か月）	日照時間（向こう1か月）
九州北部地方（山口県含む）	低10 並20 高70% 高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少30 並30 多40% ほぼ平年並の見込み

(1) 向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、高くなる見込み。特に期間の前半はかなり高くなる見込み。

(2) 向こう1か月の降水量は平年並で、平年と同様に晴れの日が多くなる見込み。

今後の生育予測や防霜対策、被覆時期の調整に気象庁の予報サイトを活用しましょう！



1か月予報（九州北部）



2週間予報（佐賀県）

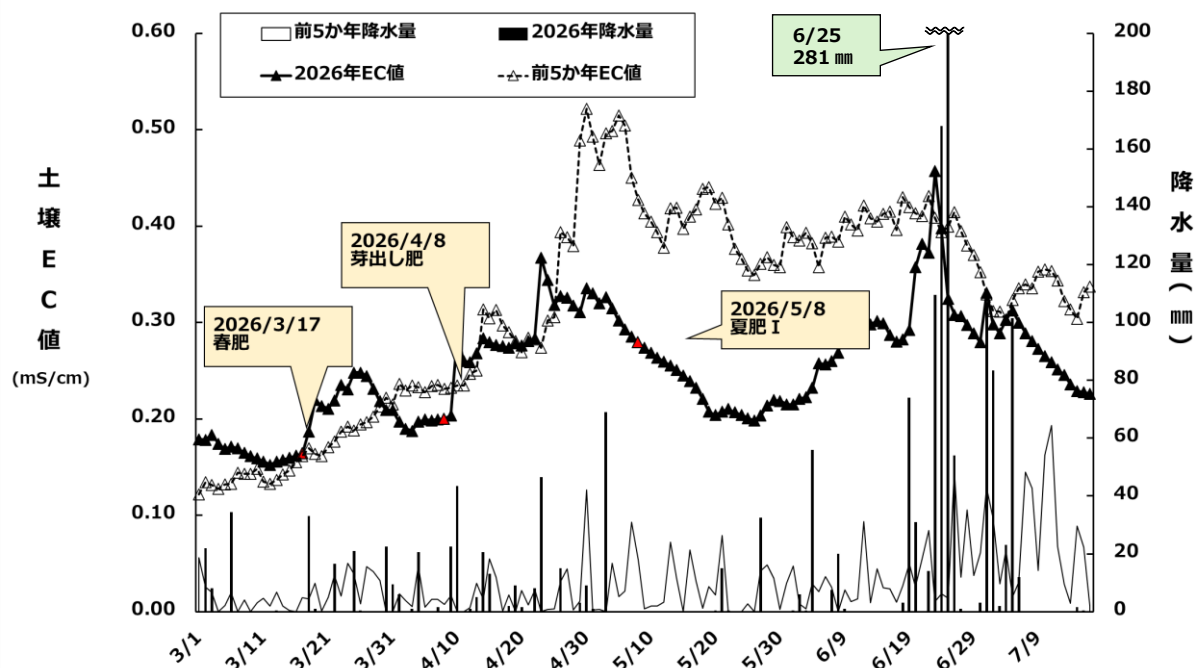
1か月予報：<https://www.data.jma.go.jp/cpd/longfcst/kaisetsu/?region=010900&term=P1M>

2週間予報：<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=85>

2. 今後の管理

1) 施肥管理

■ 土壌 EC 値の動き



注) 土壌 EC 値は、雨落ち部の深さ 25 cm 部分に埋設した土壌センサーにて測定し、実測値に基づき補正した値を示す

- (1) 土壌 EC 値は、6 月 19 日の降雨により一時的に上昇したものの、その後も降雨が続いたため再び低下した。さらに、7 月 7 日以降は雨がほとんど降っておらず、現在も低下傾向が続いている。

■ 酸度矯正

・茶樹の生育に適した土壌 pH は 4.0～5.0 であるが、県内茶園の中には pH4.0 を下回る茶園が多く見られる。そのため、苦土石灰等のアルカリ資材の投入・混和による酸度矯正が必要である。また、苦土石灰は苦土の補給も兼ねることができ有効である。

(1) 施用時期

7 月下旬～8 月中旬（秋肥施用 2 週間程前）

(2) 投入量

目安として 100kg/10a（苦土石灰の場合）

土壌や pH の実態、用いるアルカリ材の種類によって投入量が異なるため、土壌診断結果に基づき決定する。

(3) 注意点

石灰資材とアンモニア態窒素を含む窒素肥料を同時に施用するとアンモニアがガス化、揮散することがある。窒素成分が無駄になるだけでなく根を痛めることがあるため、アルカリ資材投入後、窒素肥料の施用は 2 週間程度間隔をあける。

R3	R4	R5	R6	R7
3.6	3.7	3.5	3.6	3.5

県内茶園の平均 pH（24～26 か所）

2) 深耕

管理作業時の踏圧によって土壌がしまり、通気性や排水性が悪化する。山中式土壌硬度計の数値が 22 mmを超えると根の伸長が著しく悪くなるため、深耕による土壌物理性の改善が必要である。

特に来年度中切り更新を計画している園や幼木園では深耕効果がより高く、さらに深耕前に堆肥等の有機物を施用することで土壌環境の改善が期待される。

ただし、深耕は断根を伴い、降水量が少ない場合に行うと樹勢低下を招くため、降雨が予想される時期の前に実施する。

(1) 実施時期

新根の発生が始まる時期の前にあたる 8 月中旬～9 月上旬（山間部は早めの 8 月中旬～8 月下旬）に行う。また、時期が遅れると発根が抑制されるため注意する。

3) 干ばつ対策

夏季は、来年一番茶の母枝となる秋芽の生育期であり、この時期に干ばつの影響を受けると、翌年一番茶の減収につながるため、対策が必要である。

幼木園では土壌表面からの蒸発が大きいため、特に注意する必要がある。

(1) 敷きわら、敷き草の活用

裸地の幼木園では敷きわらや敷き草を施用し、株元からの蒸発抑制および地表面の温度上昇防止を図る。

(2) かん水の実施

水利の良い圃場では、10a あたり 10t を目安にかん水を行う。

水量が限られる場合は、夕方に葉水を行う。

【かん水実施の目安】

- ・ 5mm 以上の雨が降らない期間が 10～15 日続いた場合

(3) 整枝の中止

干ばつ時に整枝を行うと茶樹への負担が大きいため、整枝は控える。

(4) 施肥・深耕の実施時期

干ばつ時は根が弱っており、肥料も溶けにくいいため、施肥は降雨前に実施する。

深耕は断根を伴い、また土壌の乾燥を助長し、新根の発生が抑制されるなどマイナス面が大きいため降雨後に行う。

4) 台風対策

台風が襲来した場合、大雨による水害、強風による茶樹の物理的損傷や潮風害を受ける可能性があるため注意が必要である。強風によって葉傷が生じた場合、傷口から赤焼病等の病原菌が侵入するため、台風通過の前または直後に銅水和剤等の保護殺菌剤（コサイド 3000、カスミンボルドー）を散布し、病原菌の侵入防止に努める。

(1) 事前対策

大雨による土壌流亡を防ぐため、園内外を巡回し集排水溝を点検、排水対策を講じる。特に沿岸地帯の茶園では、潮風害対応のため、事前に散水用の真水を確保しておく。

(2) 事後対策

強風で葉傷が生じた園では、できるだけ早く銅水和剤の散布を行う。また赤焼病等の発生歴のある園ではカスミンボルドーの散布を行う。

幼木園では、マルチのはがれや株の浮き上がりを点検し、元の状態に戻す。株が動いた場合は、早めに土寄せを行い、敷きわら等で地際部や根を保護する。

枝枯れ等、被害が大きい場合は樹の回復後に被害部の直下でせん除する。

被害園では樹勢の回復を最優先とし、整枝や施肥は控える。

潮風害の発生が懸念される茶園、特に海岸線に近い茶園では台風通過後速やかに真水を散水し、付着した塩分を洗い流す。

強風害・潮風害に伴い、落葉等の被害園では、樹勢回復のために窒素肥料の葉面散布が効果的である(ただし、最終摘採園のみ)。